

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

共通テスト第4回である令和6年度の問題の種類と各設問数、配点の内訳を【表1】に示す。200点満点は令和5年度問題と変わらない。全体の解答数についても、令和5年度問題を踏襲して50とした。

第1問は発音問題であるが、Dに関しては、ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき、ピンインによる会話問題を出題している。第2問、第3問は、令和5年度問題と同様である。第4問は、共通テスト第1回から特に充実させた形式で、コミュニケーション能力を読み取り測定する問題である。中間Aでは、大学生の会話、表とその解説の文章などから情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の受信力を測定できる問題とした。中間Bでは、学校案内のイベントを企画する場面で、会話や表などから情報を読み取り、それらを総合して発信することを想定して、適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の発信力を測定できる問題とした。第5問は長文問題で、文章の流れに合う語彙を選んだり、内容について問うなど、長文読解力全般を測る問題としている。

【表1】

問題の種類	発音・ピンイン	語句	表現理解力	コミュニケーション力	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
解答数	9	8	10	12	11
配点	36点	32点	28点	52点	52点

第1問：発音の基礎及び正確さを確認する問題、正確なピンイン把握によるコミュニケーション力を確認する問題である。

音節の3つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題及び正確なピンインの把握によるコミュニケーション力を問う出題となっている。中間AからDにわたって、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、おおむね適切であるとの評価を得た。

Dについては昨年と同様、会話文、選択肢をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、中国語の4技能をバランスよく習得するために必要な手段であり、日本の高等学校における中国語教育では極めて重要である。教科担当教員

からは、易しい単語を用いた展開のある会話をピンインで出題する出題形式は、ピンイン学習を重視する問題作成であるとして評価を受けている一方、正答が容易に選べてしまうこともあり、選択肢の文に工夫が欲しいとの意見もあった。

A：声母に関する知識を問うもので、**1**は無気音“d”と有気音“t”の区別、**2**は“x”と“s”、“sh”の区別を問うもので、正確な発音の習得と知識が求められる。

B：韻母に関する知識を問うもので、**3**は“-ao”と“-ou”の区別、**4**は“-uang”と“-ang”、“-uang”の区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で、二音節語及び三音節語における声調の組合せを問うており、三声の変調規則を含め、全ての音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦勞するポイントであると同時に、相当中国語に習熟した者でも正確な知識をままたくことがある。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション力を問う問題で、会話の流れを理解して解答する必要がある。

第2問：語彙力・表現力を測る問題である。

Aは文の一部をブランクとし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。併せて類義語の区別も問うた。**10**、**11**、**12**共に正答率が高かったために、特に成績上位層の識別に課題を残した。教科担当教員からは、選択肢が重要語であり、適問・良問であるとの評価を受けた。

BはAと同様に、語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げており、いずれも識別力を備えた問いになった。教科担当教員からは、選択肢がいずれも重要語であり、適問・良問であるとの評価されている。

Cは、100～140字程度の短文を読み、文脈に従って適切な語を選択させることによって、文脈に応じた語彙を選択する力を確認するものである。文字数はやや多めであったが、正答率が比較的高い問題となった。教科担当教員からは、適切な問題であるとの評価を受けた。

第3問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題である。設問形式は昨年度と同じである。

A：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。8つの選択肢から必要な4つを選ぶ。文法や語句の理解を確認する問題であるが、**22**、**23**は成績中位層の識別力のある問題となったが、他は正答率が高かった。教科担当教員からは、文の基本的構造や用法を理解していれば正答できる問題として適切であるとの評価を得た。

B：和文中訳問題で、選択肢の中国語はピンインで表記してあり、日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問1、問2共に日本語の表現を的確に理解した上で、ピンインで示された中国語の選択肢の全てを、それぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。問2**25**は、2つの節の接続関係の中国語での表現を考えねばならず、比較的識別力がある問題となった。教科担当教員からは、素直な出題であり、適切であるとの評価を得た。

C：中文和訳で、問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は、上記Bと同様である。問1**27**は複雑な文構造を適切に表現する必要があり、比較的識別力がある問題となった。教科担当教員からは、適切な設問、良問との評価を得た。

第4問：高校生の日常生活，大学生のサークル活動など，実際のコミュニケーションの場を具体的に設定して，身近な話題に関する資料から，必要な情報を読み取り，複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報处理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしている。中間Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力，中間Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。

現実の生活に即した素材からの出題であるため，従来出題には使われなかった語彙もこの第4問に限り取り入れている。ただし，受験者にとって難度が高い語彙は避け，正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう，配慮した。また，図表・グラフ・地図などを使って情報をスムーズに伝える工夫をしており，ここでそれらを用いるのは，そのような現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするためである。

Aは大学生の会話，表とその解説の文章から適切な情報を受信する能力を測る問題である。問1は，会話の内容を的確につかみ，その内容として適当なものを選ぶ問題である。問2は，数字を含む表と文章の内容を読み取り，どの国のことを指しているかを選ぶ問題である。問3は，まとめの表を読み取り，その内容として適当なものを選ぶ問題である。様々な情報を得て，それら进行处理し，適切な解答にたどり着く能力を測っている。問2，問3については，比較的識別力のある問題となった。教科担当教員からは，適問であるとの評価を得た。

Bは，学校案内のイベントを企画する場面で，会話や表などから適切な情報を受信した上で，それら情報を概括して発信する能力を測る問題である。問1は学生の会話の内容として適当な中国語の文を選ぶという問題である。問2は，大学内のイベント用スポットに関するメモにおいて，空欄を補う問題である。教科担当教員からは，⑤が分かりにくいという指摘があり，選択肢に更に工夫が必要である。問3は，表のポイントと学生たちの会話の内容から，それぞれの参加者がどのスポットを回ったのかを答える問題である。教科担当教員からは，文章理解能力と数的処理が融合した良問であると評価されたが，選択肢の作り方に更に工夫が必要と指摘された。

第5問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

今年度はエッセイから選んだ。長文の分量は，前回とほぼ同様の900字強とした。第5問の得点率を見ると，他の大問と比べて著しく低い値にはなっておらず，受験者に過剰な負担がかかったとは見受けられない。問題文は，使用語句，表現などにも留意しながら，共通テストにふさわしい内容に書き換えている。素材や書換えなどについても，教科担当教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

問題文は，英語だけでなく相手の言語を使うことの大切さを自分の体験を交えて述べた文章である。問1，問2，問4は，文中の空欄に入れる中国語の語句を選ぶものである。問9は，文中の空欄に入れるのに適当な中国語の文を選ぶものである。問3，問5，問6，問8は，文中の下線部の解釈を日本語の選択肢から選ぶ問題である。問7は，文中の下線部の解釈を中国語の選択肢から選ぶ問題である。問10は，従来どおり，問題文全体の内容に合致する選択肢を選ぶ問題であった。

第5問全体を通しては，問6 **45** の正答率が4割弱と最も低かった。文章を最後まで読まないで答えられない問題であったためと思われる。ほかの問題の正答率はいずれも高かった。教科担当教員からは適切な設問であるものの，選択肢に工夫がやや必要と思われるとの評価を得た。

3 ま と め

平均点は172.08点（200点満点）、100点満点換算で86.04点であり、最高点は200点、最低点は40点、標準偏差は26.86であった。中国語は他の外国語と比べ平均点が高く、今回は特に中央値が179点であったことは、大きな懸念材料として挙げざるを得ない。ただ、中国語の受験者層の特性を考慮すれば、いたずらに平均点に惑わされることなく、高等学校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験であるべきと思われる。教科担当教員からも、高等学校からの学習者が対応できるような出題を強く要望されている。本部会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは、学習者にとって望ましくないと思われる。一方で、正答率の特に高い問題と低い問題をそれぞれ分析することによって、語彙レベルや文章題の難易度をそれほど大きく変えることなく、母語話者が多いという中国語受験者の特性に対応しつつ、高等学校における学習者が報われるような問題の問題作成には、まだ工夫の余地があるように思われる。

令和6年度本試験の受験者は781人であった。本試験の受験者は昨年度の本試験の受験者735人から46人の増加となった。昨年の増加数には及ばないが、今後も受験数は増加していくことが予測される。来年度以降も、共通テストの目的に則して、基礎的な学力を身に付けた受験者が報われるような問題作成を心がけていきたい。

共通テスト4回目の結果として見た場合、シンプルな情報摂取、情報把握を問うだけにとどまらず、語学の本来の意義である読解力を問い続ける必要性がうかがわれる。

今年度も教科担当教員の方々を始め各方面から有益な意見を頂いたことに、深く感謝したい。こうした意見を参考にしながら、「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。